
逢魔が時

由卯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔が時

【Nコード】

N1838B

【作者名】

由卯

【あらすじ】

夕暮れ時の公園で、ふと出会ったもの。それは、人なか、ただの幻想なのか。主人公「佐々木依子」の忘れられていた過去の出来事とは…

出会い【1】（前書き）

夕暮れ時、通い慣れたその道で、出会ったものは…

出会い【1】

夕暮れ時の公園は、寂しい。

暖かい家へ帰る人の足取りは、心なしに軽く、そして早く感じられ一層寂しさを増すのだった。

通い慣れているこの道も、今日はよそよそしさを感じる。

いつもならば人や車の往来でこの辺も賑やかだが、冬の訪れと共にまるで皆どこかへ消えてしまったかのように静まりかえっている。

夏の照りつける陽射しの下で、心地好い木陰を求めている人々も、秋の訪れと共に次第に少なくなり、暖かな陽射しを請い求めるのだ。

人というものは、なんて身勝手な生き物なのだろう。

未来永劫、ないものばかりを請い願ひ続けるのだろうか。

今年は、秋の訪れが早かった割には、立冬が来ても陽の光は和らぐことを忘れ、容赦なく照りつける。

しかし、吹きすさぶ風は忘れる事なく、約束した場所にやって来るのだ。

色づき始めた針葉樹の葉の先に、可愛らしい松かさがところどころ下がり、黒く冷たい土の上にも一つ二つと転がっていた。

その薔薇の花びらにも似た松かさを手にとって、幼い頃母と公園に来ては、ブランコに乗って遊んだことが依子の脳裏に蘇った。

冷たくなった夕暮れの公園で、何をするわけでもなく、ただ夜の帳が迫る空を見つめていた。

テレビでは、毎日のように子供たちの自殺のニュースが流れている。

幼い頃、

人は死ぬとどうなるのだろう

と考えると、眠ることすら怖くなったのをふと思い出した。

考えれば考える程、先には何もなかった。

ただ恐怖だけが覆い被さるのだ。

簡単に死というものを選択する子どもたちの根底には、死んでもまたすぐに生き返るという考えがあるという。

自分もそんな楽天的な考えがあったら、悩まずに済んだのにと、苦笑いを浮かべる依子だった。

逢う魔が時

ふと、母が以前そんな言葉を言っていたのを思い出した。

夕暮れ時には、魔に出会うと。

幼い頃に聞いたものなので、意味も分からず、夕暮れが近づくとただ怖くて

早く家に帰らなければ

と、子供心にそう信じて疑わなかった。

多分、迷信とか言い伝えとかそういった類いの言葉なのだろう。

しかし、依子はこの言葉になぜか惹かれるものを感じていた。

人々の心の奥深いところにある、どろどろとした感情が現実のものに変わる時間だと。

そんなたわいのないことを考えながら、

このまま行くあてもない何処かへ消えてしまおうか

などと思っている自分に驚く。

いったいどうしたというのか

依子は自分の中に、何かが芽生えるのを感じるのだった。

出会い【1】（後書き）

出会い【2】へ 続く

出会い【2】

「シャーン」

どこからともなく、鈴の音が聞こえてくる。

かすかだが、しかしはつきりと、依子の耳には聞こえる。

耳を澄ませば、薄暗い闇からささやき声さえ聞こえてきそうだ。

不思議と怖いという気持ちはなかった。

音のする方に目をやると、鬱蒼と茂った林の奥に、おぼろげながら明かりが見える。

ざわざわと風が木々を揺らすと、その明かりも一緒になって揺らめき、今にも消え入りそうだ。

「シャーン」

かすかに聞こえた鈴の音も、次第に力強いものへと変わっていく。恐る恐るその明りの方へ向かって歩いていくと、木々の間に古い社が建っているのが見えた。

まるで、何者かが手招きをしているようにゆらゆらと、そんな気配すら醸し出している。

こんな所に神社なんてあったかしら

木々の葉が幾重にも覆いかぶさり、月明かりさえ届かない参道を依子の足は、まっすぐ神社の境内に向かった。

そこには、夜の闇に溶け込んだ入母屋造りの古めかしい神殿が鎮座していた。

その神殿の古びた壁の木目を見ると、様々な表情の顔が蠢いているような、かすかな息づかいさえ感じた。

その木目に触れながら、音のする方へ回廊に沿って回ると、舞殿が
せり出していた。

何かの祭祀の時に奉納する舞なのだろう、一人の巫女が、神官と
おぼしき人々の奏でる笙や龍笛、箏箏に合わせ舞っていた。

太鼓の調子も深い地の底から湧き出るように、ゆるりと流れてくる。
その奏でる音は、風の音にも、地上にこだまする人々の声にも聞こ
え、まるで大勢の人々の大きなうねりを感じる。

巫女は、二十歳前後の少女とも少年とも言えぬ顔立ちをしている。
緋色の袴に、千草模様の薄絹の衣が舞うたびに、ひらひらと揺れる。
頭には花かんざし。

銀細工で施された飾りが、松明の怪しげな灯りにチラチラと音をた
て、小刻みに揺れている。

手には、先ほどから聞こえる幾重にも連なる鈴が、何色ともいえぬ、
様々な音を発していた。

一心に踊るその姿を、依子は美しいと思った。

しかし、その舞姿は儚げで、この世のものではないように薄らぎ、
上気した頬からは、妖気さえ放たれているように見える。

松明の明かりがパチリと音を立て、白い煙が細長い蛇のように揺
らいでは昇っている。

呪文のような祝詞の調べに、依子の体は縛られるようだった。

出会い【2】（後書き）

出会い【3】へ 続く

出会い【3】

一瞬、巫女と目があつた。

そう感じた

その黒い瞳に、依子は暗黒の闇にずるずると引きずりこまれるような感覚に陥った。

前にどこかで

そんな錯覚にとらわれたが、あるはずもない。

「シャーン」

鈴の音が近づいては、離れる。

まるで波の満引きのように、規則的に。

山に木霊する風のように、大きく揺れては消える。

木の間から月が笑っているようだ。

そして。

「シャーン……」

その時だった。

遠のく意識の中で、携帯の着信音がけたたましく鳴り響いた。

依子のはっと、我に返った。

電話は義男からだった。

舞台から少しずつ離れながら、受話器を持った。

「仕事が早く終わったから、今から会わないか？」

一週間ぶりの義男の声だ。

依子はまだ、現実とも幻想とも言えぬ時の狭間で、漂う魚のようだった。

やっこの思いで、全身の力を振り絞り、ようやく口が開いた。

「義男？…」

「今、どこにいる？」

「あら何かご用？」

依子は皮肉たっぷりの笑みを浮かべながら、そして嬉しそうに答えた。

「他人行儀だな」

「一週間もほったらかしにされたら、他人と一緒によ」

「お手柔らかに頼みますよ、お嬢さん。今晚のディナーは何になさいますか？」

しばらく沈黙が続く。

今はそんなことなどどうでも良い気さえする。

しかし、一週間ぶりに義男に会いたかった。

「そうねえ、和食がいいかな」

「かしこまりました。八時に〇〇でいかがでしょうか」

義男のおどけた声が依子の心をほっとさせた。

今まで感じていた何者かの気配も次第に消えようとしている。

「今夜は、一番高いコースにしてもらおうかしら」

「怒ってる？」

依子の寂しげな声色に気づいたのか、義男は優しく尋ねた。

「誰のせいだと思っているの？一週間分のお礼はきっちりしてもらいますからね」

「はいはい。女は怒ると怖いね」

「誰が怒らせてると思っているの？」

「はいはい」

「はいは一回で宜しくてよ。ふふふ…」

依子の笑い声が闇に響いた。

静まり返った境内には、鈴の音も、音楽も、あの巫女の姿も見当たらなかった。

神殿の壁の木目も、ただの古木でしかなかった。

木々の間からは、下弦の月が足もとをほのかに照らしている。

月は青く、冷ややかに輝いている。

辺りを見渡すと、ただ松明の灯りがチロチロと赤く燃えているだけだった。

出会い【3】（後書き）

ほのかな思い　に続く

ほのかな思い 【1】（前書き）

依子の心に芽生えたほのかな思いとは

ほのかな思い 【1】

「これ、ここでいいですか？」

来週から始まる展示会の準備で、会場はひっきりかえったおもちゃ箱のようにごった返していた。

普段なら机に向かっているはずの企画課の男性陣も、各々ワイシャツの袖を捲っての作業だった。

依子は一日中の立ち仕事に、少々嫌気がさしていた。

色鮮やかな着物を眺めながら、振り袖に身を包んだのがついこの間の出来事のように思える。

今年も、幸せな家族が娘の晴れの日の着物を選びに来る。

いつもなら、親の小言をうるさそうに聞いている娘たちも、この日だけは、幸せそうな家族を演じるのだろう。

しかしそれは全てが作られた家族像というわけでもなく、娘たちにとっても、ましてや親にとっては幸せの証なのかもしれない。

自分もその一人ではなかったのか

学生の頃は、何も考えず、ただ自分の欲望の赴くまま、父に甘えていたのではないか。

そう思いながら、今一人で暮らしている父の背中を思い出すのだった。

作業がひと段落して、廊下で冷たいものでも飲もうと、依子と同僚の久遠かおりは自販機の前にいた。

「毎年のことながら、すごい数の振り袖だね。ほんと、物好き

「というか何というか、親も大変だよねえ」

かおりはそう言いながら缶のリングに指をかける。

「この会社に入って三年になるけど、新作が出る度に、感心させられちゃう」

「ほんと、今時の子のハートを射止めるのも、至難の技だわ」

十月だというのに、会場の中は蒸し暑かった。

喉を通るジュースが心地好い。

依子は、人の熱気で軽い目眩を覚えた。

自販機の横の長椅子にもたれながら、かおりとたわいもない会話を交わす。

そこへ、タオルで汗を拭きながら吉田信也と中嶋義男がやって来た。

自販機のボタンを押す義男の指をぼんやりと眺めていた。

小麦色に焼けた義男の腕は、汗で光っていた。

いつもスーツ姿しか見たことのなかった依子は、ワイシャツ姿の義男の肢体が意外にもしなやかな筋肉で形成されていることに気付く。一気にペットボトルのお茶を飲み干す義男の喉下がドクドクと動いた。

「中嶋君って、見た目より筋肉質なのね」

義男は急に話しかけられ、びっくりしたような顔で依子の方を見た。

少し困惑していた義男をよそに、吉田が一人で話し始める。

「大学時代ちよいとアメフトなんかしていたからね、こいつ」

吉田は、義男の横からちょこんと首だけ依子の方を向いた。そして、何でもスカウトが幾つかきたとか、結構上手かったらしいとか、色々と自分のことのように自慢気に話すのだった。義男のその柔らかい物腰からは、想像がつかなかった。

「その華奢な体つきからは、想像がなかったな。ねえかおり」

依子は吉田を交えて三人で話をしながらも、突然、自分の口から出た言葉に戸惑いを隠せなかった。

「依子ちゃん、都南大の中嶋を知らないなんて、潜りだよ、もぐり。大学時代なんか俺の次にもてたくらいだから」

背後から長身の西村の腕が伸び、自販機のボタンを押しながら言った。

西村と並ぶと、依子はまるで小さな子供のような気分になる。しかし、その優しい物言いは、依子には好感が持てるものだった。

ほのかな思い 【1】（後書き）

ほのかな思い 【2】 につづく

ほのかな思い 【2】

地元ではなく、少し離れたこの小さな会社に勤め始めて、丸三年が過ぎた。

それこそ、父と成人式の振袖を買い求めに来たのが、ここを訪れた最初だった。

知り合いの人の勧めで何も分からず来た父娘に、親切な接客をしてくれたのが良かったのか、この会社の内定が決まった時は、父も喜んでくれた。

初めての一人暮らしもようやく慣れ、同期ではかおりと同じ部署に付いた。

かおりは地元出身ということもあって、違う部署の社員とも知り合いが多かった。

物怖じしないかおりの明るい性格が、時として依子の元気の源にもなっている。

最近では、自分の人見知りな性格も個性だと思うようになった。

これがかおりのお陰かもしれない。

依子は、少女のように屈託なく笑うかおりの側で、楽しく過ごす日々を幸せと感じるのだった。

「自分の次というのが、良いわね。その自信ってどこから湧いてくるの」

かおりが半端噴出しそうになるのをこらえつつ、長椅子から立って、西村の肩を叩いた。

二人が並ぶと絵になる。

誰とでも話せるかおりが時々羨ましく思えた。

「実際、西村は女の子にもてる。だが、僕とそう見てくれは変わらないと思うけど、何かが違う、何かが…」

真剣に悩む吉田の姿に

「自意識過剰がここにも一人？」

かおりは軽く二、三度、吉田の背中を叩きながら、お腹を抱えて笑い始めた。

それにつられて、依子もくすりと笑う。

きょんとした吉田の表情で、作業の疲れも少し吹き飛んだ気がした。

飲みかけのジュースを飲み干し、二人席を立った。

ほのかな思い 【2】（後書き）

ほのかな思い 【3】 につづく

ほのかな思い 【3】

「あと一踏ん張り、頑張りますか」

西村が依子たちの肩を抱え込むように、会場へと促す。
がっしりとした西村の指が細い肩を優しく包み込む。

こんな何気ない優しさが女の子には心地よいかもしれない。
社内でも西村の評判は良い。

それも男女問わずというところが、憎い。

そう考えると、西村の言っていることも過言ではないのかもしれない。

「ねえ、作業終わったらどこかで慰労会しようよ」

そう言ったかおりは何かにつけて、集まるのが好きだった。

根っからのお酒好きなのか、お酒を飲む雰囲気が好きなのかは分からないが、たまに急に依子を呼び出すことがある。

依子もゆっくりと飲むお酒は嫌いではなかったが、大勢でわいわい騒ぐのは苦手だった。

「展示会も始まっていないのに、慰労会ですか、かおりさんは。

その頭の中には何が入っているんですかー、お酒かな？」

かおりの頭を揺らす吉田に

「ちょっとやめてよ」

と子犬のようにじゃれあうのだった。

かおりと吉田は幼なじみで、二人を見ていると家族ぐるみの付き合いの長さを感じる。

自分にも兄弟がいれば良いのに

と、依子はふと幼い頃に亡くなった兄のことを思い出していた。

「良いわね、何でも言える友達がいて。羨ましいわ」

「こんな狂暴な奴は、女じゃないっす」

「そんな奴にいつも助けてもらったのは、どこのどなたでしたっけ？」

誇らしげなかおりの頬はうす紅色に上気している。

少女が嬉々として話すその姿のようだ。

幼少から武道で鍛えられたかおりの体は、均整のとれた体つきだ。二人を遠目に、依子は手際よく片付け始める。

「じゃあ、片付けも済んだことだし、そろそろ行きますか」

義男のひと声で、皆一斉に動き出した。

まるで催眠をかけられたように。

少しかすれた義男の声は、よく通る声だ。

生まれつきなのか、鍛えられてそうだったのかはわからない。義男の声には人の心を動かす何か潜んでいるように思えた。

待ってました！

と言わんばかりに、かおりと吉田は今にも駆け足でかけていきそうな勢いだ。

かすかな疲労感が依子には心地良かった。

ほのかな思い 【3】 (後書き)

夜の公園 へつづく

夜の公園 【1】

「おい、吉田。大丈夫か」

酔った吉田を背負いながら義男は言った。

色づき始めた銀杏の葉が、石畳の上を秋の気配に染めていた。

依子は足早に歩いていた。

自分と同じくらいの体格の吉田を背負っていながらも、義男の歩幅に付いていくは大変だ。

アメフトで有名だったのはまんざら嘘でもないらしい。

歩く義男の広い背中を眺めながら、依子は頼もしさを感じていた。

「中嶋くん。もう少しゆっくり歩いてくれると助かるんだけど」

「ご免。気がつかなかった」

息が切れ切れの依子と並び、義男は銀杏の葉をかさかさいわせながら、申しわけなさそうに歩いた。

かすかな沈黙が続く。

夜風が依子の酔った頬を優しく撫ぜる。

ほろ酔い気分の体は、さながらふわりと宙を舞う蝶のように軽やかだ。

ずっとこのまま歩いていた

依子は思った。

そうこうしている間に、義男との別れの時間が刻々と近づいてくる。

「佐々木さんの家はどっち？」

義男が沈黙を破るように言った。

「この公園の近くだから、この辺りで良いわ」

「家の近くまで送るよ」

義男が心配そうな顔をする。

「でも、中嶋君の家、反対方向じゃなかった？」

依子は気を利かせたつもりで答えた。
しかし、

「夜道の一人歩きは危ないから…」

そう言いきって、義男はまた足早に歩き始めた。

何か気のさわる事言ったかしら

足早に歩く義男を、不思議そうに依子は見ていた。

「公園を横切っていこう」

今度は、公園の方へずんずんと進んで行く。

公園の木々は、赤、黄色、オレンジと、それぞれ自分の色にほのかに染まっていた。

その葉の色を楽しみながら、依子は鼻歌交じりで歩く。

青白い電灯がゆらりと揺らめいた。

しんと静まり返った夜の公園は、不思議と怖くなかった。

義男と歩いているからかもしれない。

依子は子供にかえったように、駆け出し、一心にブランコを漕ぎ始めた。

始めはゆっくりと、そして段々と強く。

「佐々木さん、落ちないように気をつけて」

義男の心配をよそに、依子は力強く漕いだ。

義男の声が遠くに聞こえる。

何か叫んでいるが、それさえ分からなくなりそうだった。

夜の公園 【1】（後書き）

夜の公園 【2】 につづく

夜の公園 【2】

「シャーン」

鈴の音？

依子は気がつくともジャングルジムの上にいた。
義男が心配そうに下から覗いているのが見える。

「私…」

自分の行動に少しためらいながら、依子はふらついた足でジャングルジムを下りた。

義男が半端心配そうに、そして笑いながら近づいてくる。

「佐々木さんて、結構活発なんだ。びっくりしたよ」

「私もちょっと、びっくり」

「えっ、大丈夫？」

「多分、もう大丈夫。でも、酔ってんのかな、私…」

依子はベンチに腰掛け、冷たくなった自分の手に息をかけた。

秋の夜風は、酔った体には冷たかった。

星もチラチラと凍てついた空で瞬いている。

このままでは、心までもあの遠い星のように凍りそうだ。

夜の公園は、寝静まった街同様静かだった。

石畳の上をこつこつと歩く音だけが遠くまで響く。

「吉田くん、よく寝ているね」

「ほんとだ、幸せな奴」

二人は目を見合わせて笑った。

二人の笑い声と枯葉の擦れる音がかさりと音を立てる。

「ここで大丈夫、有り難う。また来週」

依子は、先ほどの酔いも醒めたのか、足取りも軽く掛けていく。
義男は依子がマンションに入るのを見届けると同時に、吉田に声をかけた。

「いつまで狸寝入りしているつもりだ。下ろすぞ」

「人聞きの悪いこと言うなあ。」

今しがた目が覚めたばかりですよ。

でも何かいいムードじゃなかったですか、義男くん？」

そういつてまだ酔い覚めやらぬ顔で、ふらつきながら背中から降り、
義男の顔を覗き込む。

「公園に置いてくりや良かったかな、吉田くん」

少しはにかみながら、義男は顔を歪めた。

その理由が何なのかは、義男自身が一番分かっていることだ。

「それだけのご勘弁を…。」

でも、佐々木さんって見かけによらず、じゃじゃ馬だったりして。
こりゃ尻に敷かれること、覚悟しとかなくちや。ねえ、義男くん」

吉田の軽い冗談が、ころころと坂道を転がっていく。

「今から家帰る？もう終電終わってると思うけど」

意地悪く逃げるように走り去る義男の後ろから、ヨタヨタとよろめきながら吉田が着いていく。

青白い月が、冷えきった夜空をさらに冷たく照らしていた。

夜の公園 【2】 (後書き)

夢
につづく

夢（予感―） 【1】（前書き）

依子の記憶の片隅にあった、真実とは…

夢（予感―） 【1】

朝から、どんよりと曇った空は、まるで今日の依子の気分を表すかのように、雲が低く立ち込めていた。

降り始めた雨が、バラバラと音を立てて、ベランダを濡らし始める。外においてある植物たちは、久しぶりの恵みの雨に、歓喜の声を上げている。

部屋は昼間だというのにグレイのクレヨンで殴り書きをしたように薄暗かった。

夕べどうやって部屋に帰ってきたのか、依子は思い出そうとしていた。

が、記憶は頭の中でジグソーパズルのパーツのようにばらばらの状態で転がっている。

一つ一つ記憶を辿って繋ぎ合わせてみようとしたが、途切れたパーツは繋ぎ合わせることもできず、またばらばらに散らばっていく。

夕べ、飲みすぎたかな？

ずんとした鈍痛が依子の体を支配していた。

水道の蛇口からコップに水を汲み、一口くちに含んだ。

含んだ水が、生き物のようにスルリと依子の喉を落ちていく。

石のように重い体を、やっこのことでベッドの上へ運ぶ。

ごろんと横になって、薄暗い天井を眺めた。

そしてまた、うとうととまどろみの淵へ滑り込んでいく。

目を開けると、濃い霧が一面立ち込めていた。

そこには幼い依子が一人で立っていた。

前を向いても後ろを向いても、誰もいない。

行けども、明るい場所にたどり着けない。

どこか見知らぬ場所へ迷い込んでしまった子羊のように、ただうろうろと歩き回っているだけだった。

途方に暮れた依子は、突然、母の名を呼んだ。

おかあさん

しかしその声は、濃い霧に飲み込まれ、遠くまで届かない。それでも、依子は体中の力を振り絞って声を出した。

おかあさん と。

母はどこにも居なかった。

足を抱えながら、独り依子は、子守唄を口ずさむ。

それは、母がよく歌ってくれた子守唄だった。

ねんねんころり、おころりよ

泣く子ははよ

お眠りよ……

夢（予感―） 【1】（後書き）

夢（予感―） 【2】 につづく

夢（予感―） 【2】

何時間経ったのだろう。

依子は自分の嗚咽で目を覚ました。

目を開けると部屋の中は真っ暗になっていた。

雨はいつの間にか止み、アスファルトに映るネオンで外は昼間のよう
に明るかった。

ずっと母の夢など見ていなかったのに

涙が止まることを知らぬよう、後から後から頬を伝ってくる。

依子は久しぶりに子供のようになにを泣いて泣いた。

どうして悲しいのかは分からなかった。

ただ泣きじゃくりながら、ぼんやりと母の事を思い出していた。

母が亡くなったのは、小学校二年の寒い冬の日だった。

山から吹き下ろす風が、肌を突き刺すように冷たかった。

夕方には糺混じりの風で、寒さは一層厳しいものになっていった。

その日の夕方、家には母の姿はなく、学校から帰った依子は、薄
暗い部屋で母の帰りを待っていた。

待っている時間が、永遠に続きそうなほど長く感じられた。

結局その日、母は帰ってこなかった。

父はというと、さほどろたえる気配もなく、そして兄が亡くな
った時よりも落ち着いて見えた。

そのことがかえって幼い依子の胸に小さな鋭い刺として引っかかっ
ていた。

毎年、命日になると父と墓参りに行く。

しかし今考えると、母がどうやって亡くなったのか何ひとつ記憶に残っていない。

幼い頃の出来事ゆえにその記憶に疑問を持つこともなかった。

もしかしたら、母は生きているのでは

なぜかそんな予感がしてならなかった。

本当にそうならば、今どこにいるのか

依子はいてもたってもいられない衝動に駆られた。

明日、父に確かめなくては

母が生きていることを強く確信した依子は、夜が明けるのを待ちきれずにいた。

夢（予感―） 【2】（後書き）

真実と記憶 【1】 につづく

真実と記憶 【1】（前書き）

依子の記憶の片隅にある真実とは

真実と記憶 【1】

東の空が少しずつ白み始めると、西の空に輝く金星も太陽の陽の光に平伏するかのように、その輝きを消し去っていく。

夕べから考えている事を少し整理しようと、依子は濃い目の珈琲を入れた。

空腹の体に深く珈琲の香りが沁み込む。

夕べは何故急にあんなとんでもない事を思いついたのか、検討もつかなかった。

何の根拠もない出来事を本当に信じて良いのだろうか、一抹の不安を抱いている。

昨日はまだ、酔いが醒めずに昔の夢を見たのだろう。

思考が錯誤していたのかもしれない。

そう思うと、先ほどのまでの強い確信も少し揺らぎ始めるのだった。

記憶というものは、本人が思っているほど正確なものではない。

人は時として、都合の良い方向に記憶をすり替えてしまうことすらあるかもしれない。

ということは、今のこの記憶も本当の部分はほんの僅かで、真実など10%にも満たないことになるのではないか。

では真実とは何か。

そう考えると、

母が生きているということも、半分以上望めないかもしれない

と依子は思うのだった。

自分が認めたくないがゆえに、母が生きていると思いついて入っているの

かもしれないと。

それでも依子は確かめずにはいられず、雨上がりの町へ歩き出して行った。

桜並木を通過ってバス停を目指す。

雨に濡れた桜の木々は、赤紫の細い枝を大空に背伸びをするように伸ばしている。

何時もの装いとは少しかわって、水を含んだ枝は何か物言いたげな重々しさを感じた。

どこまでも伸びる枝は、これから訪れる厳しい冬に立ち向かっていくための鋭気に満ちていた。

下りのバスに乗って、家路につく。

里山の雑木もだいぶ色鮮やかに染まっている。

雨上がりのせいかな、いつもよりも木々の息づかいを強く感じた。

依子は、バスの車窓から見える秋の風景に、しばし見入っていた。

真実と記憶 【1】 (後書き)

真実と記憶 【2】 へつづく

真実と記憶 【2】

依子が出て行った時と変わらず、家は凜と建っていた。
引き戸を開け家に入る。

懐かしい我が家の香りを楽しみながら、朝日に照らされた廊下を歩く。

乾いた木の軋む音が、誰も居ない部屋に響いた。

居間にいると思って声を掛けたが、父の姿はなかった。
ピアノの上に飾ってある母の写真が依子に笑いかける。

お母さん

依子の心に迷いがよぎる。

縁側から庭先に出て、父を探した。

「お早う、お父さん」

庭木の手入れをしていた父の後姿に声をかけた。

「どうしたんだ。連絡もなしに来るなんて、びっくりしたじゃないか」

急な依子の訪問に驚きながらも、嬉しさを隠し切れない父の笑顔を見て、依子も少し嬉しくなった。

「もうすぐお母さんの命日だと思って、早めに着ちゃった」
依子の笑顔を見て、父も微笑んだ。

「どれ、お客様にお茶でも差し上げようかな」

父は、手折った花を何本か手に持ち、依子の背中に手をかけ縁側

の方へ歩いた。

そして先ほど庭先で咲いていた柗の白い小さな花を花瓶に生け、母の写真の前に置いた。

束状の白い花は鈴のようにゆらゆらと揺れ、ほのかな甘い香りが流れる。

この木は、クリスマスに飾る西洋柗とは違って、赤い実はつかないらしい。

昔から、邪悪の侵入を防ぐために庭木にされると、以前父から聞いたことを依子は思い出していた。

「仕事の方は順調か？」

慣れた手つきでお茶を入れながら、父が聞いた。

母が亡くなってから、男手ひとつで育ててくれた父は、今年で何歳になるのだろう。

今までそんなことなど考えもしなかったが、白髪交じりの父の頭を見て、依子はこれから先の父の生活のことを思い浮かべていた。

「来週から振袖の展示会なの。忙しくなりそうだわ」

「そうか、もうそういう時期か。」

懐かしいな、おまえが成人して三年が過ぎるのか」

そう言って、父は目を細めながら、お茶を飲んだ。

久しぶりに父の入れたお茶を飲みながら、依子は深いお茶の香りを楽しんだ。

「そろそろ母さんのところでも行くかな」

短い沈黙を破って、父が立ち上がった。

真実と記憶 【2】 (後書き)

真実と記憶 【3】 へつづく

真実と記憶 【3】

家から近くの川原までそう遠くはない。

川に沿ってだらだらと坂道を下っていくと、一面に田畑が広がる。山の方に向かって木々が茂っているところに母たちが眠っている墓地があった。

日の光が川面を銀色に照らしていた。

依子は、余りの眩しさに目を閉じた。

見渡す限りのものの全てが黄金色に染まっている。

川原の草までも、ただの枯れ草ではなく、冬支度を一齐に始める気配がそこかしことしていた。

「母さん、元気だったか。今日は依子も一緒だよ」

父は墓石に水を掛けながら、母に話かけた。

依子も父の横で、手を合わせた。

そして、意を決したように静かに父に向かって話しかけた。

「お父さん、私、昨日お母さんの夢を見たの。」

そして、何故か、お母さんは今でも生きているんじゃないかと思った。

どうしてなのか分からないけど、そう思えてしかたがないの。お父さんはどう思う？」

依子言葉に父はうろたえることなく、落ち着いた口調で答えた。

「そうだな、お父さんも今でもお母さんは生きていると思っているよ」

意外な父の言葉に、依子にはじり寄って父の上着の裾を握り締めた。

やはり、あの夢は何かを暗示していたのだ。母は生きている！

そう確信した依子は、心の中で叫んでいた。

「でも、もう居ないのだよ。この世にはね」

次の瞬間、依子の期待は、父の一言で音をたてて崩れていった。

「えっ、今さっき生きているっていったじゃない。

あれは嘘なの？」

「嘘じゃないよ。

母さんは私の心の中では、いつまでも生きているってことさ。

依子だってそうじゃないのか」

余りにも真剣な依子の表情に少ししたじろぎながら、父は穏やかに言った。

そして、落胆する依子の顔を見て、ぽつりぽつりと話始めるのだった。

真実と記憶 【3】 (後書き)

母の行方 へつづく

母の行方（前書き）

父から聞く、母の行方とは

母の行方

あれは、11月の最後の日曜日。

八幡神社のお祭りの日だった。

おまえと祐介は母さんに連れられ、祭りの見物に来ていた。

奉納される神事や男集の御輿を、二人とも目をきらきらさせて見入っていた。

4年に一度のこの祭りは、何百年もの昔から執り行われ、三日間続けられる。

その中日には、舞殿で奉納される幾つもの踊りが一番の賑わいを見せる。

私も幼い頃から、この祭りに参加できる日を夢に描いたものだった。

夕暮れが近づく、露店に灯りが点り、りんご飴や焼きイカの香りが鼻をくすぐった。

正午から奉納された踊りがひとまず終了し、おまえたちのところに行くと、祐介の姿が見当たらない。

祭りということもあって、どこかで遊んでいるのだろうと軽い気持ちでいたが、祭りが終わり参拝客もまばらになった。

参道の露店の明かりも一つまた一つ消えていきつつあった。

大勢の人々が手分けをして祐介を探したが、見つからず、夜も更け風が冷たく石畳を吹きすさむ。

そのうち氏子の一人が

「神隠しにあったのだろうか。

それとも、魔が連れて行ったのか」

と突拍子もないことを言い始めた。

今の時代にそういうことがあるものかと私は信じなかったが、人々

の心の内は、そうではないかという不安で、暗澹とした表情に変わっていった。

その後も搜索は続き、しかし一年経っても何の手がかりもないまま捜査も打ち切りになった。

それからというものの、母さんは毎日々暮れ時になると、神社に祐介を探しに出かけるようになった。

何をするわけでもなく、ただ日が沈むまでベンチに腰掛け、沈む夕日を眺めているだけだった。

いつもお前はそんな母さんの後を追いかけて、新しくできた公園のブランコで遊んでいたが、母さんにはお前の声も姿さえも見えていない感じだった。

秋も深まり、神社の境内にある御神木の大銀杏が黄金色に輝いていた。

風が吹くたびに、銀杏の葉が雪のように舞い、降りしきっていた。

ある日、私はその中に佇んでいる母さんが、嬉しそうに微笑んでいる姿を見た。

まるで何かに微笑みかけているように、幸せな母さんの顔を今でもはっきりと覚えている。

夕日に照らされて、母さんの影までも黄金色に輝いていた。

それが母さんを見た最後だった。私は、あの時、祐介が迎えに来たのではないかと、思えてならなかった。

なぜそう思ったのか分からないが、多分、おまえが、母さんは今でも生きていると思っているのと同じように、私もそう思っているのだ。

ぽつりぽつりと話す父の後姿を、少し高くなった朝の光が、優しく

く包むように照らしていた。
消え入りそうな父の影が、揺らめきながらしかし暗く父の足元に落ちていった。

母の行方（後書き）

八幡神社　へつづく

丙 八幡神社 [1] (前書き)

八幡神社で、偶然にも義男に会う。
そして、何者かの存在も大きくなっていく。

丙八幡神社 【1】

父が話し終わると、目の前に八幡神社の鳥居が見えてきた。父と依子はじっとその古い鳥居を眺めた。

朱塗りの鳥居には、古い記憶が幾重にも重なっているような重々しさを感じた。

鳥居の背後の鬱蒼と茂った杉林の参道の遥か向こうに、黄金色に輝くあの銀杏の大本が見えた。

その大銀杏の下だけが、黄金色の落ち葉で異界のように輝いて見えた。

自ずと足がその黄色い輝きの方へ導かれていく。

遠くで矢を放つ音が聞こえた。

どこかに弓道場でもあるのだろう。

その空を切る音に、依子は神々しさを感じた。

銀杏の大本を右に折れて、音を頼りに近づいてみると、一人の男性が遠く離れた的に向かって、一心に矢を放っていた。

その一心に放つ後姿に、依子は見覚えがあった。

急に風が吹いた。

石畳を砂が舞い、白く霞む。

ぱたぱたとしたためく道着も、強風にあおられていた。

弓の手を止めたその横顔を見たとき、依子の顔は驚きと喜びの入り混じった表情に変わった。

その横顔は義男だった。

どうしてこんなところに

不思議そうに眺めている依子の横に、いつの間にか父が並んで立っていた。

「依り子の知り合いか」

父が近づいて来たのさえ分からずに、依子は義男を見ていた自分に気づいた。

依子の気持ちを知ってか知らず、父は義男に近づき、話しかけていた。

「今度の祭りで奉納されるのですか？」

父に気づいた義男は、その端正な身のこなしからは想像できない無邪気な笑顔で、話に答えた。

依子は、飾り気のないそんな少年のような彼の笑顔が好きだった。

「ええ、従兄弟がこちらの方に居ないもので、今年は私が代わりに流鏑馬を奉納します」

「ほう、御若いのにその堂々とした身のこなし。

私、痛く感銘を受けました。

幼い頃から弓道をやっておられたのですか？」

「祖父が弓道の師範をしていたものですから、幼いころから教わっていました。

しかし、祖父が亡くなってから少しさぼり気味で……」

旧知の友にでも語りかけるように、二人の会話には心地よい旋律が流れていた。

少し緊張気味の話し方といつもよりも口数の多い義男に対して、依子は何時にもない親しみを感じた。

それは、父も同じようだった。

二人の背後から依子がそろりと現れると、義男は驚きを隠せない様子で、そのビックリした義男の表情を見て、依子も父も笑った。

「お父さん、会社の同僚の中嶋義男さん。

こんなところで偶然会うなんて、不思議な縁ね」

依子の頬が仄かに色づいた。

丙八幡神社 【1】 (後書き)

丙八幡神社 【2】 へつづく

丙八幡神社 【2】

その時だった。

義男の表情が微かに曇った。

何かを感じたその表情は、先ほどの笑顔とは一転して、険しいものだった。

「どうしたの？」

依子が義男の顔色の变化を見て、心配して尋ねた。

「いや、何でもない」

そう言って義男は、力強く弓を鳴らし始めた。

弦の低く鈍い音が、神社の境内に木霊した。

その波動に木々が共鳴するかのように揺れ、風の音が一層大きく聞こえた。

銀杏の落葉が風に舞い、黄金色に煌く葉が依子を誘うように螺旋を描いていた。

その風の音に体の芯が共鳴するようだった。

小さな竜巻の中に人影を感じたが、人がいる様子もなく、小さな風の渦が幾重にも起こっては消えていった。

義男の行動を見ていた父が

「もしかしたら、貴方のおじい様は菊池内蔵助きくちらのすけという方ではありませんか」

と思い出したように聞いた。

「祖父をご存知ですか？」

弓を引く手を止め、義男が振り返って言った。

「それは有名な射手でしたから。

貴方があの内蔵助さんのお孫さんですか…。

どことなく面影があります」

どうやら父は、義男の祖父のことを知っているようだった。

縁とはどこでつながっているのか分からない、不思議なものだと依子は思った。

義男と自分は、逢うべくして逢ったのだと、出逢ったことは偶然ではなく必然だったのだと、強く感じ始めていた。

「どうやら、何者かは立ち去ったと見えますな。

練習の邪魔をしてはいけませんので、私たちはこの辺で」

父は一人足早にその場から去っていった。

「じゃあ、中嶋君。練習がんばってね。また明日。」

父の後ろ姿を依子は小走りに追いかけた。

父が義男に言った最後の言葉が気になったが、今は父を追いかけるので精一杯だった。

義男は二人の後姿をじっと見つめた。

手に持った弓が小刻みに震えているのを微かに感じると同時に、何かが動き始めていることを感じていた。

丙八幡神社 【2】 (後書き)

約束 につづく

約束【1】（前書き）

朝になっても依子の心は晴れなかった。
しかし、そんな日だが予期せぬことが…

約束【1】

父は急に用事を思い出したと言って、そそくさと出かけてしまった。

もう少し、父と話したかったのと思ったが、致し方なかった。

依子は昼過ぎには家を後にしなければならなかった。

ピアノの上の母の写真は、帰ってきた時と同じ微笑を依子にかけていたが、母に対する思いは先ほどとは違ったものに変わっていた。真実と記憶の狭間で、依子の気持ちは手放された風船のようにゆらゆらと漂っていた。

誰もいないガランとした家の空気に、押しつぶされそうな重圧感を感じた。

お母さん、本当にもうどこにも居ないの？

依子の弱々しい声に、柵の白い花がかすかに揺れた。

明くる朝、依子は勢いよくベッドから飛び起きた。

背伸びをしながらカーテンを開け、ベランダに出る。

この二日間ろくなものを食べていなかったせいか、軽い空腹を覚えた。

少し冷たい朝の空気を思いっきり吸い込み、キッチンに向かった。

「今日から展示会だ。よし、頑張るぞ」

自分の気持ちに気合をいれるために、頬を両手で軽く叩いてみる。朝は軽めの食事で済ませるのだが、今日から五日間の目まぐるしい忙しさを思うと、そうそう落ち込んでなどいられなかった。

野菜ジュースを冷蔵庫から取り出し、空腹を満たすために一気に飲み干した。

昨日久しぶりに寄った実家の近所の八百屋や肉屋など顔見知りの人たちの元気な顔を思い返すと、胸が少しだけ熱くなった。

産みたての卵の黄身が、プルンとフライパンの上で揺れている。

ハムを焼く香ばしい香りが依子の食欲をそそる。

依子は手際よく朝食の準備を済ませた。

雑穀入りのパンが香ばしく焼け、その上にハムと半熟の卵を乗せて食べるのが子供の頃からの依り子のお気に入りだった。

大きめのカフェオーレボールを抱え込むように持ち、ゆっくり喉に流し込む。

毎日のように繰り返される食事も、まるで一種の儀式のようなものだと思っただと依子は思った。

身支度を整えながら、鏡に向かって、化粧を施す。

「誰が見るわけでもないのに」

とつぶやきながら、昨日、神社で会った義男の道着姿を思い出していた。

いつもとは違う義男に出会えたことの嬉しさが、今更ながら込み上げ、顔が綻^{ほころ}んでくる。

今日からは、義男のために、綺麗になろう

そう思うと、鏡の中の自分も嫌いではなくなってきた。

時計を見ると、八時を回っていた。

テーブルの上に散らばっていたものを、必要なものだけ鞆の中に投

げ入れ、玄関の扉を勢いよく開けた。

約束【1】（後書き）

約束【2】へつづく

約束【2】

深まりつつある秋の気配を感じながら、朝露で濡れた石畳を足早で歩く。

今朝は吐く息も白く、寒さで指先が悴^{かじ}んだ。
後ろからかおりが元気よく走ってきた。

「おっはよう！」

どこら辺から走ってきたのか、かおりの吐く息が熱く感じた。

「おはよう。今日から展示会開始ねっ」

軽快なかおりの声に合わせるように、依子も元気よく答えた。
そんな依子の声色の変化に、いち早くかおりは気づき、

「何かいいことあった？」

と屈託ない笑みで依子ににじり寄ってきた。

「何もないわよ。変な子ね」

かおりの勘の鋭さに、依子はある種の動物的なものを感じた。
何もないといったら嘘になるが、義男への思いを容易く口に出すことを依子は躊躇^{ためら}った。

「あれから、吉田くんたち大丈夫だった？」

「ずっと中嶋くんが背負ってたわよ」

「吉田くんらしい。でもお邪魔虫だよ、吉田くんも。」

朝一番にとつちめないと」

そう言うのと、ちょうど前方に歩いていた吉田を見つけ、かおりは勢いよく走り始めた。

「ちょっと待って」

追いかけてようとしたが、鍛えられたかおりの健脚にかなうはずもなく、

依子は一人ぷらぷらとかおりの後姿を眺めながら歩いた。

「おはよう」

後ろから誰かが挨拶をする。

ちょうど、義男がバスから降りてきたところだった。

何を話しているのか躊躇ためらいながら、二人は沈黙の中歩き始めた。

義男が何か思い出したように、鞆の中から封筒を取り出した。

「貰い物で悪いんだけど、薪能のチケットを二枚貰ったんだ。

久遠さんとか、行かないかな」

そう言って依子の手封筒を手渡し、そそくさと逃げるように、義男は早足で吉田とかおりの方へ歩いていった。

それを見ていたかおりが、一人で歩いている依子の側に寄り、にやけながら

「何、話してたの」

と聞いてきた。

「薪能のチケット貰ったの。かおり行く？」

「何々、デートのお誘い？ 薪能とか、エラク渋くない」

かおりがちよつと顔を顰めた。^{しか}

「かおりとどうですかって、貰ったのよ」

と依子が申し訳なさそうに言ったのを聞いていなかったのか、前に歩いていた義男を呼び止めた。

「中嶋くん。この日は、私、都合悪くて。依子を連れて行ってよ」

かおりの突拍子のない言葉に、依子は驚きつつも、そうしたいという気持ちが心の隅で湧いてきた。

「いいよ。じゃあ待ち合わせの時間は、後で」

義男はそう言うと、吉田とすたすたと先に行ってしまった。

思ったよりもあっさりとした義男の態度に、少し期待はずれの気がしたが、横でかおりが

「初デート、おめでとう」

と嬉しそうに顔を染めているのを見て、依子も満更でもない気持ちになった。

「おめかししてね、依子。」

「でも、夜、外でお能見るだけだから、レストランとか行くわけじゃないし、

おめかしするのも変じゃない？」

「じゃあ、下着とか？」

「もう何、言ってるのよっ」

二人は、お互いの顔を見つめあい微笑んだ。

そんな、他愛のない会話でも、かおりとのひと時は姉妹のいない
子にとって楽しい時間だった。

約束【2】（後書き）

遠出 につづく

遠出【1】（前書き）

初めての義男との遠出。
依子の心は打ち震えるのだった。

遠出【1】

「2, 500円になります」

おぼろげな気分の中、意識がはっきりした時は、高速を下りる途中だった。

高速道路の出口からのスロープを下りる車の速度は、よちよち歩きの子供が歩いているような、間怠まだるっこしさがあった。いつの間にか眠ってしまったらしい。

どのくらい眠ったのだろう。

初めての義男とのドライブだというのに、不覚にも眠ってしまった自分に、女としての資質を疑ってしまう依子だった。

「ごめんなさい。私、何時の間にか眠ってしまった」

「いや、気づかなかった」

気恥しそうにうつむく依子をよそに、意外にもあっけらかんとしている義男の返事に、気負っていたものがドサリと落ちた気がした。そして、一人で浮かれていた自分に、一抹の恥ずかしさがこみ上げてきた。

この人は、クールなのか。それとも、鈍感なのか

運転する義男の横顔を盗み見しながら、依子は、どういう態度をとっているのか、迷っていた。

何だかそっけない態度の義男に

本当は、来たくはなかったのかもしれない

一人悶々とする気持ちの中、すっかり紅葉してしまっている森の木々を、ぼんやりを眺めていた。

車の中は、義男らしく、すっきりと片付いていた。

一度、かおりの車に乗った時、可愛いクッションやカバーなどが、まるで自分の部屋のように飾り付けてあるのを見たせいか、義男の車の中は、殺風景といえるほど何もなかった。

性格というのが、こういうところから出るものかと、依子はくすりと思い出し笑いをした。

「何か、面白いものでもあった？」

声を出して笑っていたらしく、義男が楽しげにしている依子の横顔に尋ねた。

「かおりの車とは、全然違うなと思って」

「彼女の車の中、どんな感じ。凄いの？」

「凄いというか、車の中って、以外にもその人の性格が出るのかなと思って」

「鋭いところ突いてくるね、佐々木さんは」

おどけた義男の表情で、依子の緊張も少し解れた気がした。ほぐ

あとどの位あるのだろう。

この道のりが永遠に続くのだろうかと思いながら、依子は微笑んだ。

山の緑が次第に少なくなり、ぽつりぽつりと民家が見えてきた。

暫らくすると、市街地らしい町並みが見え始めた。

市街地はもと城下町らしい佇まいを残しながら、新しい建物と融合していた。

格子戸や漆喰の壁、一昔前にタイムスリップするように、車は町並

みへと溶けこんでいく。

何かしら温かさを感じるのは、ここに住む人たちの心遣いの現われなのだろうか、依子は初めて訪れた町なのに、妙に落ち着いた気分になった。

「素敵なところね。初めてなのに、懐かしい感じがする」

「高い建物が建っていないからかな。何か、町に住む人たちの、心が伝わってくるようだね」

依子は、義男が自分と同じようなことを思っていたことに、微かな喜びを感じていた。

遠出【1】(後書き)

遠出【2】へつづく

遠出【2】

町は少し傾いた柔らかな陽の光を浴びて、黄金色に染まっていた。車内にも、その柔らかな光が差し込んでいた。道に沿った水路の水面が、きらりと銀色に光り、時々魚の尾ひれが水面から見え隠れしているのが見える。

「確か、ここら辺りだと思ったんだけど」

路肩に車を止め、義男は地図を広げ、目印の城跡を探した。外の空気を吸おうと、依子は車から下りた。

こつこつと靴音が響く古い石畳が、町の歴史を物語っている。歩道に沿って均等に立っている街灯も、町の景観を損なわないように古めかしいガス燈風に設しつらえてあった。

依子はあちらこちらと見物しながら、ふらふらと歩き始めた。

陽もまだ暮れていないのに、町はしんと静まりかえっていた。そのことが一層秋の寂しさを増すようだった。

向こうから人が歩いて来る。

その人に道を尋ねようと、依子は歩み寄って行った。

つむじ風が依子の前を通り過ぎた。

石畳の上を白く砂が舞い、依子は軽く目を閉じた。次に目を開けた時には、そこには誰もいなかった。

まぼろし？

不思議そうにしている依子の横に、義男が車をつけた。
先ほどよりだいぶ歩いたらしい。
車の窓を開け、

「随分先に行っていたので、慌てたよ」

心配そうにしている義男の顔を見て、依子は申し訳なさそうにぺこりと頭を下げ、微笑んだ。

「場所が分かったから、行こうか」

助手席のドアを開け、座席についたと同時に、義男は依子の右手を強く握りしめた。

動悸が伝わりそうなくらい、強く握りしめたと思ったのも束の間、義男ははっとその手を振り解き、車を急発進させた。

依子は義男の顔をまともに見ることができないまま、その火照った頬を見られぬよう窓の方を見つめた。

暫く二人の間を、暗く重たい沈黙が支配したが、少しして、城壁が見え始めると、

「あの城壁の向こうが、会場だ」

張り詰めた空気を押し破るように、義男が重たい口を開いた。

依子は、義男の声で体をピクリと動かし、その優しげな声に、包まれながらも

「どこかで、お茶しましょう」と答えるのがやっとなった。

遠出【2】（後書き）

蔵・カフェ
へつづく

蔵・カフェ（前書き）

夕暮れ時のカフェで、一時の安堵にひたる二人。

蔵・カフェ

城跡を過ぎたところに、土作りの蔵を改装したカフェがあった。乾いた土壁がとことどころ剥げ落ち、過ぎ去った年月の長さを物語っていた。

駐車場の近くには、こんもりと盛り上がった土の上に、銀杏の大木がどしりと立っていた。

黄金色の葉が夕日に映え、眩しいほど輝いている。

見ると、その木の下に小さな祠があった。

きちんと掃除がいき届いた祠の鳥居にはしめ縄が張っており、依子は近づこうとしたが、触れてはいけなようなそんな気がして、遠巻きに見つめがら蔵の扉を押した。

鉄で出来た扉の飾りは、風化で赤茶けていた。

ざらついた扉の装飾の上に、後から付け足した木の取手がついている。

鍵穴からぶら下がった鎖がガラガラと音を立てた。

「いらっしゃいませ」

カウンターから気のよさそうなマスターが声をかける。

客席をひとまわり見渡したが、開いている席がなく、マスターがカウンターの方に二人を案内した。

一枚板でできたカウンターは、それだけで重厚な趣を醸し出している。

冷えた水の入ったグラスが置かれた天板が、スポットライトで黒く光っていた。

微かに流れるボサノバのリズムが、店内を沈み行く海辺の夕日色に染めていた。

「素敵な隠れ家ね」

依子が呟くと、マスターが嬉しそうに

「ありがとうございます」

と軽く会釈をした。

「薪能があると聞いて来ました。

初めての土地なので、少し迷ってしまっ……」

席に着きながら義男が困った顔を見ると、

「正味一時間というところですか。

お茶をするにはもってこいの頃あいですね」

鶯色の表紙のメニューを、二人の間に置きながらマスターが微笑んだ。

メニューを開くと、手書きの文字が踊るように黄色く色褪せた紙の上を走っている。

殴り書きをしたような文字だが、それはそれで味わい深く、二人の目に飛び込んできた。

「これ、マスターが書かれたのですか？」

依子がメニューの文字を指差して、マスターの方に向けた。

「お恥ずかしい文字で」

「個性的でとっても素敵ですよ。書道家っぽくて、私、好きだなあこういう字」

無邪気に話す依子の声を聞きながら、義男もそうだとばかりに頷いた。

「何か、くすぐったいですね、そういうの」

はにかみながらも、嬉しそうにマスターが笑った。

「お勧めって何ですか」

「キャラメル・ラ・テが女性には人気ですよ」

先ほどのメニューの話で緊張が解れたのか、依子は息もつかずに話し始めた。

そして、この三時間余り、ほとんどしゃべっていなかったことに今更ながら気づくのだった。

余程緊張していたのだろう。

急に喉の乾きに気づき、カウンターに出された水を、ごくごくぐりと美味しそうに飲み干した。

「美味しい。おかわり下さい」

空になったグラスの水が、カランと鳴った。

差し出されたグラスに新しい水が注がれ、グラスについた水滴が、すっと黒く光るカウンターに落ちた。

「それじゃあ私は、マスターお勧めのキャラメル・ラ・テにしようかな」

冷たいグラスをカウンターに置いて、依子が言った。

そして、紅潮した頬を冷やすように、水滴で濡れた掌を頬に押し当てた。

「僕は、クラブハウスサンドとモカを」

落ち着いたのらない子どもを諭すように優しく、依子の方を向きながら義男が言った。

「私も食べようかな。」

でも、量が多い時は、中嶋くんお願いね」

義男は、少女のようににはしゃぐ依子を見ながら、普段の彼女とは違った一面を覗き見たようだった。

女性とは、一体、幾つ顔を持っているのだろうか

と考えながら、今から観るのであろう薪能の、様々な表情の能面を一つ一つ思い浮かべていた。

そして、自分の隣で幸せそうにしている依子を見るだけで、義男の心も少しずつ満たされていくようだった。

蔵・カフェ（後書き）

薪能 へつづく

薪能【1】（前書き）

凍てつく寒さの中、薪能が始まる。
その中で、出会ったものは…

薪能【1】

カフェの重い扉を開けると、暮れなずむ空が朱鷺色から暗い闇へと変わろうとしていた。

温かな家の中からすると、外は大分冷えこんできている。肩をすばめて、二人は足早に車に乗りこんだ。

「寒くなってきたね」

「防寒、バッチリよ」

温かな飲み物は、人の心までも温かにするものだ。一時間余りで、二人の間には、先ほどからの暗い沈黙は消え、お互いの距離が縮まったような温かさを感じていた。

車のエンジンをかけ、薪能の会場がある城跡に急いだ。

開演まで、時間が三十分もなかった。

少し長居をしてしまった。

と、思いながら、義男は逸る気持ちを押さえた。

駐車場がまだ開いていたのが、せめてもの救いだった。

能舞台の会場までは、大手門から石の敷き詰めた広場を抜け、坂を上らなければならなかった。

明りといえば、所々に焚いてある松明の灯りのみだ。

日もいつの間にかとっぷりと暮れ、寒さも先ほど以上に厳しくなっていた。

凍てつく寒さを頬に感じながら、義男と依子は、暗闇に伸びる城壁

を眺めた。

「よし、行くぞ」

義男はそう言うのと、依子の手をしっかりと握りしめ、坂道を掛け上がった。

依子は、息があがりそうになるのを必死で我慢した。

しかし、義男の健脚には敵うはずもなく、坂の途中で走るのを断念した。

依子が急に止まったので、義男は前のめりに倒れかけたが、持ち直しながら、ゆっくりと、依子の歩調に合わせて歩き始めた。

「ご免、せっかちで」

「いいの、私が運動苦手だから」

握りしめた手が少し汗ばんできた。

「走ったら、暑くなっちゃった」

義男の握りしめた手からするりと抜けると、依子は一步先を歩き始めた。

見上げると、人々の黒い影が、坂の上の城跡に流れこんでいた。その群れに流されるように、二人も上へ上へと登って行った。

薪能【1】（後書き）

薪能【2】へつづく

薪能【2】

城壁の上には、ライトアップされた大きな城が君臨している。

普段は、資料館に使われているそれは、昔の威厳を取り戻さんばかり、再現されているようだった。

真新しい白壁が、スポットライトに照らされ、青白く聳え建っていた。

その右手の方には、薪能が演じられる能舞台が作ってあった。

大勢の人で、会場はざわめき立っていた。

この中で人を探すのは、到底無理だと思い、義男は

「もし、逸れた時は、駐車場で落ち合おう」

と、念を押した。

依子を見ると、何故だか何処かへ消えてしまいそうな、そんな心もとない感じがするのだ。

「分かった。迷子の時は車のところねっ」

依子は、義男の腕にそっと自分の腕を絡ませ、

「これで、よし」

と、無邪気な笑顔で、義男の顔を覗いた。

掛け声と共に、軽快な鼓の音で、幕が開いた。
独特な能楽の地謡が人々の間を駆け巡る。

謡い人の声にも、囃子方の奏でる音にも、命が吹き込まれ、人々を

一瞬にして魅了する。
あけまく
揚幕がすつと上がり仕手が登場すると、そこは、仕手と観客一人一人の世界になるのだった。

言葉は分からなくとも、仕手の感情が、依子の心には届くようだった。

能面が無表情ゆえに、その感情の高鳴りが強く感じられた。
仕手の謡が耳なりのように、頭の中で響く。

依子は、その場に立っているのがやっとだった。

その時だった。舞台の背景が松の木から、黄金色の銀杏の木へと変わった。

黄金色に輝く銀杏の木の下で、仕手が幽玄に舞っている。

依子はいつの間にかよろよろと、その黄金色の光の方へ歩み寄って行った。

仕手がゆつくりと、謡いながら、能面をすりりとはずした。

その謡の響きからは、想像できないほど若い青年の顔が現れた。

能面によって籠もっていた声が、直接、耳の奥に響き始める。

依子は、懐かしい聞き覚えのあるその声に、身も心も委ねるような感覚に陥っていった。

薪能【2】（後書き）

薪能【3】へつづく

薪能【3】

雑踏の中、依子は義男を捜していた。

いつの間に逸^{はぐ}れてしまったのだろう。

駐車場に行くよりも、この雑踏の中から義男を見つけたかった。大海原に、一人船を漕ぎ出した気分にも似た感覚で、依子は義男を捜した。

一瞬、波を割るように人の波が途切れ、その先に、険しく、そして悲しげな表情の義男が立っていた。

「もう、絶対、その手を放さない」

そう言った義男の目には、強い決意が見えた。

「しっかり手を持っていたんだけどな」

申し訳なさそうに依子が言ったか否や、義男の腕は依子を引き寄せていた。

頭の中で、人々のざわめきが耳鳴りのように聞こえる。

こんな近くに人の温かさを感じたのは、久しぶりだった。

というよりも、人と深く関わることを、依子自身ずっと避けていたことを、義男の肌の温もりが思い出させた。

義男の鼓動が、規則正しく聞こえ、依子は、生きている喜びを感じずにはいられなかった。

その鼓動と舞台上響く鼓の音が重なり合いながら、天高く木霊する。

能楽の第二場が始まるとなおも、義男の腕に力が入った。

それは、依子を守ろうとする義男の抵抗の全てだった。

そんなことで、依子を守れるとは義男自身、思っではいなかった。

しかし、見す見す何者かの手に、依子を委ねることは出来なかった。

「中嶋くん…」

仕手の謡が遠くから、囃子方の音と流れる中、今の依子の耳には、それさえも聞こえなかった。

ただ、義男の鼓動だけが依子の耳に響くだけだった。

薪能【3】(後書き)

疑問へつづく

疑問（前書き）

突然の義男の行動に、依子は何かしら疑問を抱き始めるのだった。

疑問

まだ夢の中に居るような憂鬱な気分で、依子はベッドの上に横たわり、薄暗い天井を眺めていた。

先ほどまでの抱擁を、思い出すだけで指の先まで熱くなるのを感じた。

先ほど義男がとった突然の行動に、依子は少しずつ、何かしら疑問を持ち始めていた。

いつも沈着冷静で、何事にも動じない義男の、あれほどまでに動揺した顔を見るのは、初めてだったからだ。

— いったい、何が起こったというのだ —

依子は一つ一つ、反芻するように記憶を辿っていた。

車の中で的事、カフェでの事、そして薪能での事を思い出すごとに、所々記憶の途切れた部分があることに気付いた。

しかし、幾ら考えたところで、思い出せない断片は、容易には繋がらなかった。

深い靄もやの中では、どう目を凝らしても、見えるはずもない。

明日、義男は弓の稽古に行くと言っていたのを依子は思い出した。

— この疑問を解決するために、明朝、電話をしよう —

あれこれと思い悩む間に、疲れた体から次第に力が抜けていった。

依子は、何時しか深い眠りについていった。

目覚しが鳴る前に、依子は目が覚めていた。

時計を見ると、七時ちょうどを差すところだった。

アラームが鳴り始めたのを、急いで消し、携帯電話を握った。

—もう起きているだろうか—

夕べ家に帰り着いたのが、午前12時を回っていた。
ということは、義男が帰宅した時間は、何時だったのだろうか。

—往復六時間も車の運転をしていたのだから、
だいぶ疲れていたのではないだろうか—

そう考えると、朝からくだらない事で、義男を叩き起こすことが心苦しかった。

—何か、差し入れでも作っていかうかしら—

依子は冷蔵庫の扉を開け、中を覗いたが、さて一体何が作れるかと考えている間にも、時間は刻一刻と過ぎていく。

—急に持っていて、迷惑だろうし、何が好きかも分からないな—

煮えきらない自分の性格に苛立ちながら、依子は気分を切り替えようと、洗面所へと向かった。

お気に入りの石けんで顔を洗い、その香りに包まれた。
鏡に映った自分の顔を眺めながら、軽く溜息をついた。

—私のどこが、好きだというのだろうか—

一人呟きながら、好きという言葉に酔いしれている自分の姿が、滑稽に思えてくるのだった。

身仕度を整え、少し明るめの口紅をひいた。

―これで、少しはいつもの私とは違った自分になれる―

呪文のように何度も唱えながら、依子は鏡の中の自分に向かって微笑んだ。

疑問（後書き）

万葉植物園 につづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1838b/>

逢魔が時

2010年10月10日10時48分発行